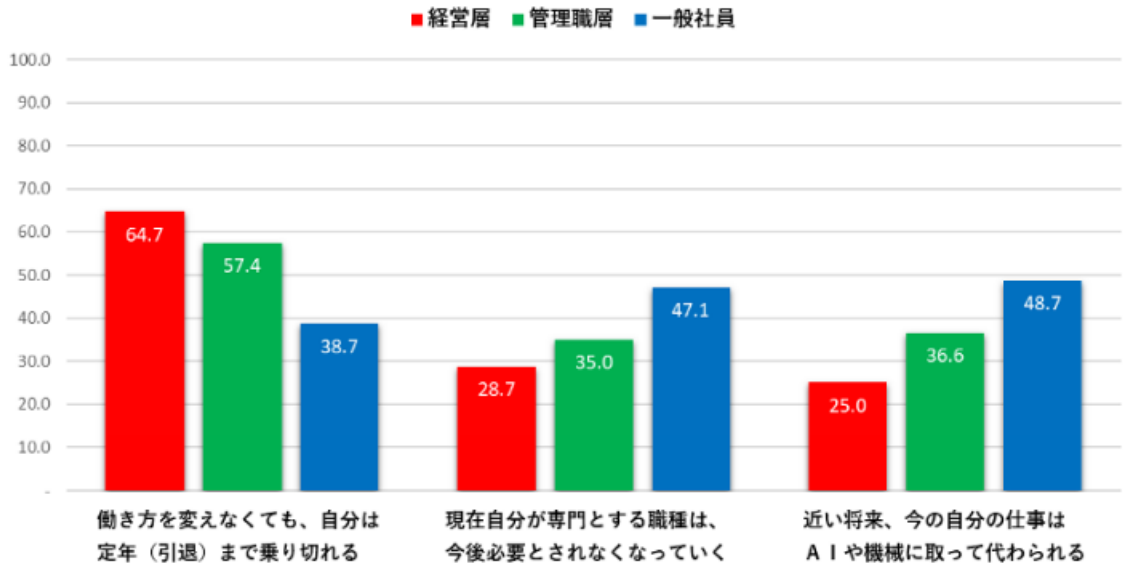
「自分の仕事将来 AI、機械が代替　日本企業一般社員の半数予測」

「現在、自分が専門とする職種は今後必要とされなくなっていく」。「近い将来、今の自分の仕事は将来 AI（人工知能）や機械に取って代わられる」。日本企業に働く一般社員の半数はこのように見ていることが、広告代理店「博報堂」の調査で明らかになった。働き方をめぐっては「45 歳定年制を敷いて会社に頼らない姿勢が必要だ」とする新浪剛史サントリーホールディングス社長の発言（9 日経済同友会夏季セミナー）が、大きな論争を呼んだばかり。「首切りをするということでは全くない」と新浪氏が釈明する事態となっているが、日本企業の一般社員の半数は冷静に社会の変化を見ている現実をうかがわせる調査結果となっている。

経営層と一般社員の意識に差

15 日結果が公表された博報堂の調査「『会社と私の本音調査』 第 1 回・働き方の本音」は、今年 2 月、インターネットを利用した方法で行われた。新型コロナウイルス感染拡大「第 3 波」の最中で、調査対象は、社員 100 人以上の国内企業に勤務している 1､250 人。内訳は経営層 300、管理職 500、一般職 450 人となっており、個人事業主、家業手伝い、パート・アルバイトは含まれていない。

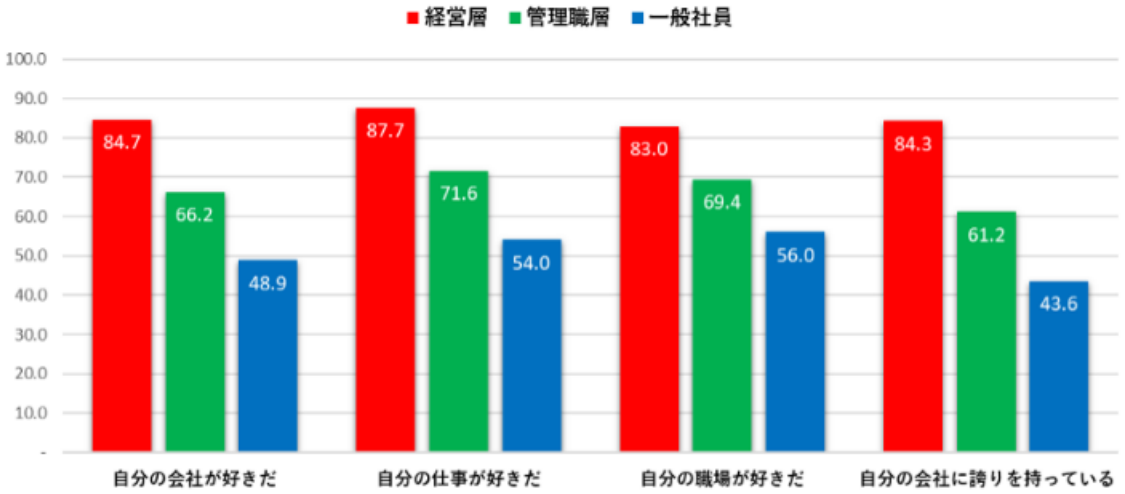
働き方や仕事に関する各層の本音を探るのが調査の狙いだったが、特に経営層と一般社員の意識・価値観に大きな違いが浮き彫りになった。「働き方を変えなくても自分は定年（引退）まで乗り切れる」と回答した人は経営層で 64.7％だったのに対し、一般社員は 38.7％に留まる。さらに「現在、自分が専門とする職種は今後必要とされなくなっていく」は、経営層の 28.7％に対し、一般社員は 47.1％。「近い将来、今の自分の仕事は将来 AI（人工知能）や機械に取って代わられる」も経営層の 25.0％に対し、一般社員は 48.7％。いずれも一般社員の半数が、今の仕事がなくなっていくと冷静に感じており、経営層との違いが目立つ結果となっている。



（博報堂「『会社と私の本音調査』 第１回・働き方の本音」から）

会社に誇り持つ一般社員も半数以下

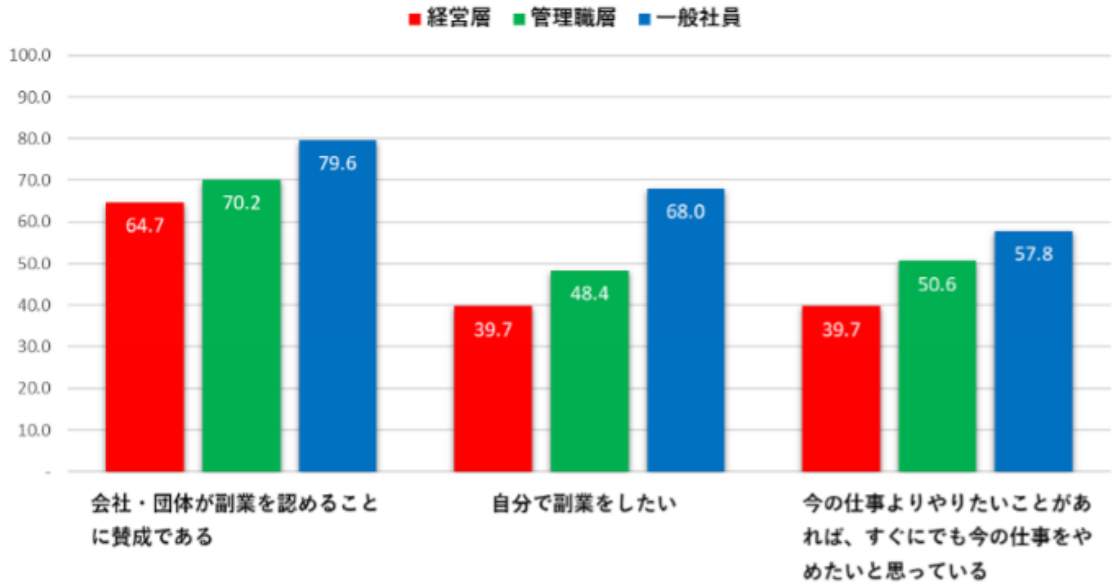
同様の違いは、自社や仕事に対する思いにも表れている。「自分の会社が好きだ」「自分の仕事が好きだ」「自分の職場が好きだ」「自分の会社に誇りを持っている」のいずれの質問に対しても、経営層より管理層、管理層より一般社員という順に肯定的な答えが減っている。自社や仕事への愛着や誇りを持っている人が経営層では 8 割以上に上る一方、一般社員はその半分程度でしかない。特に意識の差が大きかったのは「誇りを持っている」か聞いた項目。経営層の 84.3%に対し、一般社員層は 43.6%に留まり、40 ポイント以上の大きな差が見られた。



（博報堂「『会社と私の本音調査』 第１回・働き方の本音」から）

副業認める声多数に

新型コロナウイルス感染がもたらした変化の一つに、社員に副業を認める企業が出始めたことがある。調査結果からも「会社が副業を認めることに賛成」は経営層、管理層、一般社員層全てで 6 割を超え、会社全体としても外に開きつつある変化がうかがえる。特に一般社員の副業に対する肯定的な考え方がはっきり出ており、79.6%が「会社が副業を認めることに賛成」、68.0%が「自分で副業をしたい」、さらに 57.8%が「今の仕事よりやりたいことがあれば、すぐにでも今の仕事をやめたい」と答えている。いずれも経営層、管理職層を上回る比率だ。



（博報堂「『会社と私の本音調査』 第１回・働き方の本音」から）

これまで日本では、急速な少子高齢化への対応、特に社会保障制度の維持の観点から、定年延長が必要だとする議論が盛んだった。政府の経済財政諮問会議の議員でもある新浪剛史サントリーホールディングス社長の経済同友会夏季セミナーでの発言は、人材の流動化が日本企業の価値を高め、経済を活性化するという考えに基づくとされているが、ネット交流サービス SNS 上では、新浪氏の発言に批判的な意見も多い。

小岩井忠道（科学記者）

関連サイト

博報堂調査レポート「『会社と私の本音調』 第１回・働き方の本音」

博報堂「会社と私の本音調査」 第 1 回 働き方の本音 ｜ニュースリリース｜博報堂 HAKUHODO Inc.